



新局玉石童子訓

卷十三



透 13
1279
28



1279
28



刊田

新局玉石童子訓卷之十三

東都 曲亭主人人口授編次

第四十三回

深夜の盗を捕へ賢郎家寶を全と
闇刀玉を碎きて老賊創て懺悔と

その時末朱之女の呼ぶ声に随ひ奥より出づ其人の宿六あるをまご見も
知らぬ社伎あるが訝りあつて我を入りと和郎は是れ何人ぞ宿六の在るを
やと問ふ社伎然らば小父の前月節供の比三池邸より去りぬ何れかの
所用欵知らねども今日の間奥あひがたり我上の豫より小父の呼ぶるも
あへん這里ある故の家あり留守七の獨子ある金九郎即是れ和君の
小父宿六の語説を聞きたり卒先這方我まをぬるといふ小朱之女
あるゆゑ我も亦其名を知る金九郎ありけり許さぬと肩より下を

二二〇五二川卷一三

一〇一〇

襖裏と酒樽をよそ其頭小窓にて地炕の邊に坐を占むる盆九郎の埋
火を掻起しつと扱ひのやう。偶來まきり珍客ある宿六を在らむとも代り
て此の款待を必まへた該るれども。いふせん取をりぬれば。理もあらずと世の
常言の宜る哉親留守との病中より年貢の未進村の借財せん術
のあり隨ふ我身の久しく夫役の参りて城内に在り。僅に糧を賜ふのそ
酒も酒飲を寒天の夾衣一領で藻塩草撥集むる亦畧々。聞錢境の造
化多して西へ東へ身の振がさふ。一霎時暇をありて。より來ぬま。又借財の
債らして術あるさふ。村長刀袵振向け。今日這家を賣渡さる。我が有りて
我有るぬ。這里に寝るも今宵の。明日は又城内へ。より参りて。夫役部屋の厄
會ふる。と思ふ今朝より氣を腐らして。腕を枕抱火盤炭團と共に瘦
るまで。現ふ苦の絶ぬ世とそと。呻言さす。此身上話ふ。朱之ん。も嗟歎しつと。

開の妙ありぬるあり。我も亦宿六の知られ。如く彼拘神の一義
より。絶て久し。母刀自と今の阿爺の環會を。開け儘同居を。れどもと
いひの外。回見より。そと。日暮る。最寒なり。有斯る。一。知らぬ。て齋
する酒。茲にあり。夜食代り。酌替へ。夜と共。話さ。是温め。と。今。手。抗
て。此。件。の。酒。樽。酒。菜。を。盆。九。郎。見。つ。合。笑。て。ま。逆。る。御。造。作。り。て。反。て。痛。ま
煎鍋も。燗鍋も。皆。售。場。へ。酒。盃。も。あ。る。り。か。ど。貧。乏。堀。の。身。を。離。れ
を。輾。轉。て。御。坐。を。是。處。の。樽。の。酒。移。し。て。尻。を。焼。て。ん。と。ち。戯。ま。う。と。幾。ある。
蒼。柴。地。炕。の。折。焼。に。て。積。炭。の。堀。酒。茶。碗。一。箇。を。敗。折。敷。の。酒。菜。も。裁。り
竹の皮。松の皮。の。杉。箸。添。て。送。り。酌。を。と。り。膳。不。彼。一。概。我。一。概。飲。し。て。酬
え。ろ。手。袂。より。そ。暮。め。れ。と。柄。火。燭。し。て。四。下。を。光。ら。せ。夜。酒。飲。盆。九。郎。の。身
を。起。し。て。門。の。戸。引。て。坐。ふ。る。主。客。送。り。薄。醉。の。舌。さ。廻。る。朱。之。ん。も。溢。り

まての節せう。茶碗の酒を一口飲ん又盆九郎小向ひての事。多辯の要るの死
るあが。響の閑場をさる我上を今詳し盡せん我阿懐の骨肉の思愛
るのいあゝされば客扱ひあせりねど。阿爺の素是質物にて親類衣し小彼
百金を久くくまると竟小遠與さど刺往る比城内にて試撃の折我怒
て落馬を腰の骨を折れしより。阿爺のそれを料し疾死ぬりと
いのぬむり小只難面のとてあされたる。然るにあゝねども親とりの字小勝
よりあひまを蛇を押えて愈るを俟し小四五日前より稍瘡りと百里の路も
は易けし先や他郷小走らんと尋思をあら阿懐小談と拘神の百両金を
受取らま欲る然も婦人の浅なる老阿爺と肩を比べけん手實を引
裂棄られし腹立さき涯もあひねを敵手の親あり婦人あり。小甲斐ある
者あゝねが阿容々々と告別し躰て那里を立去りし今日亭午の時候

ありた非如手實を破らして宿六といふ證人あま俱小國守小訴て百
両金を取らまや已んと思ひ今來る途にて又克念へる事も亦迂遠
ゆて埒明がせん開の優て手短多主張るにあゝねども初對面を
和主の這肝胆を吐くより。といひて盆九郎眼を睜りてその亦聞えぬ
るあり。我小父あゝ宿六老邁ゆて彼小達ぐもあゝさ怪の猶子
の如し。錢あゝぶらとあゝ和君の資助あゝさんやとむりあて照
据るく猶も疑ひ思ひ思ひん要こそあれと奥の方より敗る扇箱をひ
來つ開か儘朱之奴示しつゝ。我家祖傳の什物あり是を質りて
和君小預けん先見らひねと拿出まを朱之奴受取て燈下で熟視る小柄
附る刀子で青海波の三字銘あり小柄則全白金で波濤の知鳥の高影
あり。朱之奴冷笑ひて盆九然をり胡詐を盡す。あゝ世小掃る名刀あり

假令先祖傳來ありとも。貧農の和主等か。今も心藏り置ぐもあはれ必別
 來歴ありん。隠さる告よ甚麼ぞや。いふぞやと詰り。金九の困りて頭を擡て小
 見られて脱路あり。其刀子のいぬ比咄等がものまのて開を詳説し時
 彼城内にて試撃の折咄等の茶番の夫役にて西の集會所在り。其日
 大江と吹の少年の中刀の附さる這小柄の錢ふるべく思ひかへ久しく
 隙を窺ひし彼人腰に放さる手を下をよりありし。小畫餉の割筆を
 披き折りのある者即是。これとも蠅く是を售り立地小人知られて事
 の破さふありのやせんと思ふの故に秘置しを今拿知して和君小見する。赤心
 を知らせんとの外へ漏るゝのひそと真術立て叫くを朱之ぬり又冷笑ひて膽
 魂の見どころあれども。開の只刀子細工を我片腕に負む足らぬ先を是を
 斂めよとのひつ。投返を刀子を金九郎の本意あがし扇箱に藏めても治り

ぐら口の咎漫ありたと吐け。朱之ぬりち笑ひて否今の言ハ戯とのも。
 然らば我計較の奥の院をうち閑ん秋耳をむと曳とせ。今既ふりひ
 つ。如く敵手ふるぬ阿爺の吝蓄血を分らるる阿懐を。形の如くの造化
 ろれ。左ても右ても商量盡て。拘神の價百兩金を渡さる。変あるを所詮
 今宵潜入りて阿爺の金銀の有涯り。擡攫ひて走らる。親の物の子の物と
 竊むふ似て盗むふあはれ。差引出入過不及りの。算帳を消さるん。是
 ら。等の子の我身單也。做しぐらふあはれ。いま。飽を思ふよりあり。阿
 爺が養老種ふと。愛する一箇の螟蛉女あり。其名を晚稻と喚做して。年二八
 十二分の縹致這頭ふ稀ある。我又其奴ふ怨あり。元自の腐骨折序次小
 宿鳥の晚稻を擡攫して。京秋浪華へ持てゆいて。娼妓小售る。五六十金の身
 價の易く。あはれ。義を和郎小頼むあり。今宵阿爺ハ或病架の床徹ぬて

招き酒を装ふ該ふれどさへ必真夜中過ん子三刻の時候我と和主と
 那里のゆゑに窺ふて我の背門より潜入りて阿爺が納戸の秘指ぬる款冬花
 のちとん和主の前門の頭より竹橋を乗て裡面に入りて先脱路を啓く下り而
 しと玄閑の潜入らる其次の中回又其次の出入居の間を左りの庵溜右の納戸より
 晩箱の戸簾の納戸あり和郎の咄等小斟酌せ晩箱の蚤く布囊を
 袖せて肩擔せぬり。都合ふ地方の圓通河原の材木の蔭に候ん和主
 こそ其首の等ね辛苦銀の等分よりせり。と叫ぶ言詳小説示せ盆
 九郎の幾回とあり領たるか合笑てその最妙なるあり初更を過りて這
 里を出るべ子の時候必那里に追らん又喫り。と地元の堀見をやらせり
 掖中見て噫鈍や無敷なる長談小心引きて絶れ残る一壺を煎酒とせと去
 りるをれといひつ自酌の茶碗を受て吹ひく三口の喫乾して卒とを献せば朱

のすの由奥に乗して又一霎時俱に酔を盡しける現同病相憐る同氣
 相求りぬる友人の一面の故舊の如く壳を吠ゆる盗跖の犬自物あり
 身の好友を送り知るや白布の積鼻禪の端を頭をきこふ酒小寒苦
 を忘草心の鬼の醜草も冬枯れぬり長夜夜の遠寺の鐘小深初て既
 小時分ありしと朱之の盆九郎をのそり立て出まると當下盆九の身を起
 して身整へ且の各我身小寸鍔ありてせ萬一人小知らして逐るるのあ
 らん時何をりて敵小當らん撮小るれども物ある青海波の刀子茲小あり是
 究竟と拿抗て折敷小残る竹の皮を三折小巻て輕小る彼刀子を懐小楚
 と扱めて立出まると朱之の盆九の旅中刀を腰小帶つて袂包を引提てのそり夜路
 殿へ寒く冷望月の影明けとて惑ひをせと圓通河原を過る時朱之の盆九
 菅笠と袂包を其頭より建し材木の蔭小隠れを見くへる盆九の歩を駐

めて大哥くさふ取る為欵といふ間ふ朱之次ハ走り就つ去向の首尾を
 謀し合しとや程ふ夜ハ子の初刻といひた時侯吾足の門ハ來ふけれど
 朱之次ハ相別とて背門より潛入らまも當下盆九郎ハ離色を乗内ハ
 入りて先前門多摺戸の鎖を外し戸を密と閉て脱路ハ便りよく又
 女関の戸を外し納戸を投て潛入る。その夜吾足齋の宿所多。阿夏の老
 亭ハ晚稻と共に良人の之を俵ける。既ハ女中ハ過ととも門の戸敲く音
 もせざれば晚稻ハ透ふ允されて納戸ハ入りて枕ハ就ぬ。老亭ハ獨細なる燈
 下を掲げり。單物の本を讀見て在り。ふ更ゆく隨ハ寒氣ハ堪ねハ置炬
 燵ハ大火桶ある。火を拿移る。蒲團を被て寢る。ふ脚踏入とて
 横卧しより程もあく。そハ儘熟睡をり。ふ前後の門より盜見の入るを
 夢も知らざりけり。余程ハ朱之次ハ案内ある。上るれば吾足ハ家の裏

手より板塀を乗松を傳ふて庭ハ閃りと下立て左右とて擔廊ある。戸を
 一枚推開て納戸ハ潛入る程ハ盆九郎も亦茲ハ來つ。晚稻ハ枕の頭多圓行
 燈の火光を對しと鎖くのも朱之次ハ今撈らまも。檜木戸架の
 鎖固ければ盆九郎も手傳ふて力を勤しと採断捨る。晚稻ハ方僅睡端
 めて且幸少ければ嗜睡を朱之次ハ覺む。あ。と見よりさう指さし示せ盆
 九郎ハらる。て晚稻の夜被を搔拿強く登り。菟も勢ハ晚稻ハ忽地驚に
 覺て吐嗟と叫ぶ。口ハ手拭銜る。布囊拵扎く。両手を振りて屏風ハ掛る
 帯をもち繰々纏ふ最緊し。綁縮めと動らむ。開か同ハ朱之次ハ戸架の
 内ハ小簞笥を撈りて奪ふ。財囊ハ金三裏の重多あり。か。あ。と豫上
 り思ひ。と。このハ。ふ。虽ハ集まて。暴鷲の雛猴を執む。異る。盆九郎ハ
 音小泣く。晚稻を小股ハ楚と抱に揚て。外面投て。時阿夏の老亭の枕方

火桶小撲地と駆け上りありける真鍮藥罐の瓦辣哩と墜て灰さ茶
 さ煙を起て散乱を老亭は是れ驚に覺て身を起し金九郎を見つ吐嗟と
 胆を潰して戦て心利に墜る藥罐と鏡火箸を両手小拿てち鳴り命を
 涯の聲限り小賊有々と叫ぶ程小合壁ある津問屋の主人はさう旅客まで事
 ありけり驚に覺て要時あり毛成起て庭口傍の小片折戸を推つ敲ら入
 まくは浩處小吾足齋の彼病架中強られ酒小酔ても本性錯む夜深て
 かつ中辞去りて單宿所へ程小謡亭唄る生酔の一步の高く一步の
 低く只是跟々踏々と辿り着ける已が門を見よ小樞戸開てあり訝り
 ぐ我入ると玄関の戸も亦一枚外される欵寄掛てあれば心驚に
 かつ開が随ふうち登る程小盆九郎の縛膝けし晩箱を小腋小撥抱て撞見
 見小吾足齋小礮と相値ふ迄の驚に前後退く西三歩吾足は透さる聲

立ち盗見せと引提る小挑燈を衝と刺せ金九郎の面を見られどと左の
 拳を挿して挑燈撲地と打落し簡夜の善悪ある在實々問ある吾足
 齋は抜た是れ又の雷電盆九郎抱て晩箱を盾小両手小拳て受留る
 額舎を撃つ又の鋭味憐む二六の少女の胸の邊を深痕の一刀叫びも
 あぬ猿鏢は只是巴蜀山峽の腸を断つ鮮血の絳吾足は人や錯ふけん
 思へ躊躇ふ開が程小盆九郎の晩箱を投棄て懐ある刀子を抜かす吾
 足の膳を小柄も徹と丁と刺し刺して吾足の苦さるり小醫居小控と
 仆る程小盆九郎の又を抜取りて跳越つ暮地小外面投て逃去折々這
 頭を過る少年あり是則別人を大江杜四郎成勝今宵も青海波の
 刀子の在處を撈り知らずりさ小峯張米六郎通能を將て石見好純
 と共侶小甲夜より市を涉揚つ更闌てる路程料らも吾足の門を過



五足齋



吾足齋
 晩稻を
 刃

三石齋三言卷十三

文治堂

る折る門内より突然と出る暴漢あり。右手の又を執られ賊のべりと
 を中猜しと去向小立て聲高かつふや留まれとのりをも果を盆九郎の刀
 子を振晃りて走蒐るを四郎の鬨を身を反して利手を捉て撲地と
 蹴る蹴らして盆九郎の又を捨て筋斗の一文をり。前面控と介折も後
 まで來ぬる栄六の杜四郎聲を被て峯張其奴を縛む。とのりも栄六あり
 びて起んと掙扎盆九郎を捕て壓て動をも。腰小準備の早繩を手繰出
 ちの痺々と緊しく結扭て推居けり。是時高嶋石見も挑燈の蠟燭を途
 小接易て來ぬけり。杜四郎見之。只今怪しむ暴漢を搦捕する夏の顛
 末箇様々と告知りし石見が携る圓挑燈の光りを借りて。今暴漢
 が振捨る又を索ねて拿抗見ふ。あ疑ふもあぬ。三十日夜索難
 る青海波の刀子ありけり。杜四郎の歡び。石見も栄六郎

も欣然と一と俱みのや。原来這奴の前月望の日大江家宝の刀子
 を竊と取りし賊あるや。向ざりて知るべ死のものと。杜四郎點頭て只
 其罪あるのをも。這刀子も其奴が夜も鮮血多く塗れ。今憶
 ふ今宵竊盜の為。這家小潜入りて人不傷するあそ。今緊
 敵を何をもて實を吐ん。強く拷問せし。とのりも栄六阿と志
 て腰の鑢扇抜せ。息を養れ。持懲せ。盆九郎の苦痛不堪。その
 身の素生云と具小告て又のや。御推量の如く。其刀子の衆少年の試
 撃の折已か。來心を竊取りし。這頭で售ら。其玉小早く知
 られんるを怕れて深く秘措ゆ。この里の家主人吾足齋ふ。已か
 した怨あれ。今宵詰來て彼人と角口の怒り。乘して其刀子をりて。痰
 を負して走り去ら。折刀初原小撞見。搦捕とひ。天罰を

のら。とのふを石見の冷笑ひて大江主望のひ一欵今這奴が招了まる野刀子の
 るの實あまぐ。吾足齋のの信ごり。といへ染六も俱のの争。件の吾足齋
 延明の咱等相識あね。彼末朱之女の乾父といふ人の噂小栗一の。今
 宵其門前。他仇者。賊を捕て青海波の刀子をより復け。最奇之
 とのふ小杜四郎再説。及む。現。這盗児の片言を詰りて時を移さんより。
 疾。這家。呼門て事實を探るふ。あ。と。とのふ石見も染六郎も。
 みる。と。心。俱。盆九郎を牽立て。因。て。ある。角門より。我。入り。り。
 呼門。と。奥。奥。人の聲。さ。の。出。迎。る。者。あり。けり。是。より。先。末。朱。之。女。
 晚。指。を。畧。奪。る。に。る。を。盆。九。郎。不。任。て。見。う。る。を。只。彼。金。子。を。の。せ。ん。と。え。
 辛。く。て。小。簞。箆。の。財。囊。を。撈。り。以。て。披。出。せ。る。最。重。か。り。け。り。と。い。へ。憶。
 り。を。満。面。笑。を。含。て。撥。扠。ら。り。身。を。起。を。程。不。次。の。坐。席。小。臥。し。り。け。り。

母老芋が睡眠覚て何ゆあ。ん。う。ち。鳴。く。賊。有。々。々。と。叫。ぶ。ゆ。ぞ。朱
 之。女。へ。心。慌。て。面。を。見。せ。り。と。思。ひ。も。其。頭。を。過。る。ふ。あ。ま。れ。ば。庭。不。出。る。脱
 路。あ。け。れ。ば。只。得。其。次。の。間。へ。出。る。を。老。芋。へ。驚。か。る。燈。火。の。光。不。看。一。看。て。
 開。へ。珠。不。あ。く。を。と。喚。も。湯。果。を。身。を。起。て。推。留。あ。ま。く。あ。て。け。れ。ば。朱。之。女。
 の。弥。慌。て。冬。蟲。の。如。く。檐。廊。へ。身。を。跳。し。て。走。り。出。て。庭。へ。閃。り。と。飛。下。り。勢。力。劇
 しく。ひ。き。つ。か。り。柱。の。眩。壺。鏡。不。持。ち。財。囊。を。掛。曲。ら。れ。て。忽。ち。断。離。れ。て
 手。不。残。り。財。囊。へ。柱。不。吊。り。て。あ。る。を。立。戻。り。て。合。ま。る。暇。あ。け。且。庭。の。折。戸。を
 蹴。破。り。て。逃。去。す。る。程。不。隣。家。あり。け。津。向。屋。より。庭。口。傍。ひ。人。多。く。
 這。方。へ。来。り。挑。燈。の。火。光。間。近。く。見。え。り。朱。之。女。の。度。を。失。ひ。て。進。退。惑。ふ
 窮。る。の。り。案。内。知。ら。る。上。あ。れ。ば。庭。あ。る。酒。井。不。身。を。繫。し。て。透。を。び。ば。扉。を
 乗。て。逸。去。す。る。思。ふ。の。り。便。を。汲。り。け。り。介。程。不。津。向。屋。ゆ。へ。老。芋。を。烈

一に喚聲と打鳴を物の響の常あるさる小驚覺て事ありけりと至も小
 厮も挑燈を引提六尺棒を衝立て裏手傍ひ小来ぬける程小當晚同宿
 の旅客等も思ひ合せるよりやありけん皆共侶小起出て主人の後小從ふて
 庭門を心来ぬけまど内小入らんはまをふて開が儘樹蔭小立集ひて事の容
 子を知らずと老芋は是を知らねども今津問屋等が来ぬるを見て泣聲
 立てやよ更立疾来ぬひね今宵我家の前後の門より両箇の盗見潜入
 て俱小納戸小在り一時箇様々々のさふより奴家が睡覺へ久恐怖忘
 して皆さるを喚集せし程小件の一箇の盗見ハ蝨く外面逃去りぬ又
 一箇の盗見ハ庭へ走ぬればとも既小逃亡けん今ハ影小見えぬありぬ猶心許
 るは方僅納戸小ぬたて見る小晚指ハ卧筆小在るありぬ戸架ハ鎖を毀れて
 良人の貯祿の金子あざり多く竊と合りとてけり欲筆筒の内ハまどより見

ねども狼籍のべらうもあまざり。又只その子のとまをて方纒玄園の方小當
 りて人の挑む如に音響えし其後のつふあふんぬたて見ぬと思ひも然
 しも物のちをりて胸の騒がれけり。と告る小驚く津問屋の主人も
 小厮も眼を睜りて開ぬ安らぬるありぬ。とひひも亦挑燈を振照して
 主僕玄園小ぬたて見ぬ思ひけり吾足齋ハ深痕を之負しけん右も小刃を
 拵あつら鮮血小塗れて仆せ在り又其身邊小女兒晚指ハ帯りて手足を拵
 られて胸より腹小刀瘡あり共小生さるもあまざればあは什麼如何とら騒が
 老芋を呼て云云と告る小老芋ハ胸の潰れ涙の外小泣くよりもあつら
 丈夫と女兒の空に屍を抱起し呼活れども甲斐あるさるもあまざれば
 津問屋の主僕を伴ふて隨即父女の亡骸を開が儘坐席小昇入る。津問
 屋と罵りて俱小抱あつら折る外面小入ありて幾回とら呼口を事小

紛々誰もか。耳の入りらありけ。津問屋の主人が梢のつて訝り。小厮を出して其来意を問ふ。一霎時ありて三箇の武士一箇の暴漢小重索掛たるを牽せり。件の小厮を案内して主人の妻小対面せん。軀て奥まで来ふけ。老母のきつ津問屋の主人も其人々を知り。心訝りあり。先上坐小席を譲りて又其来意を請問。一箇の武士は。いふ。俺は當国守家の兵頭高嶋石見。好純是之。又是る。同伴の両少年は。武者修行の為。地来ぬ。大江杜四郎成勝。峯張六郎通能。是之。名告。杜四郎も俱ふのや。俺の比城内。衆少年の試撃の折。我腋挿の刀。小附。家室の小柄を喪ひ。高嶋王と相謀りて。夜々市小涉。獨程。小方僅。這頭を過る。この盗兒。金九郎が。最小の刀を握持。是の門内より走り。物心をもち。見ては。遣も過。を擲捕。其事。

實を責問。小這奴の枸杞村。古人留守七の獨子。金九郎と喚。做。五人ある。隻も俺。刀子を竊。會する。招了。より。知。其。刀子の立地。より復。て。茲。在り。と告。其。六。其語を次。て。小。件の。刀。子。ゆ。這。奴。が。衣。巾。の。塗。れ。ぬ。故。あり。ぬ。思。ふ。を。り。猶。も。賤。く。責。問。小。這。家。主。人。吾。足。齋。小。然。あり。て。口。論。の。折。痕。を。負。せ。り。と。其。多。信。ト。く。けれ。事。の。實。を。知。り。為。小。叔。を。牽。り。て。来。つ。ま。れ。と。い。ふ。小。老。母。の。涙。を。斂。め。件。の。三。士。小。向。ひ。て。い。ふ。奴。家。の。老。母。と。喚。と。吾。足。齋。の。妻。也。也。り。今日。も。良。人。の。病。架。小。招。れ。て。更。圍。ま。ん。と。来。を。折。り。兩。箇。の。盜。見。あり。其。一。箇。の。我。夫。の。貯。祿。の。所。を。豫。知。り。納。戸。小。入。り。て。財。囊。を。引。提。て。背。負。の。方。物。を見。の。往。方。を。知。る。と。又。一。箇。の。盜。見。の。女。兒。晚。箱。を。擲。攫。ひ。て。玄。關。の。方。小。入。り。を。奴。家。の。楚。と。認。む。も。其。折。良。人。の。子。来。て。廝。戦。て。親。も。女。兒。も。俱。小。深。痰。小。

息絶す欽開何ありけん知るは信りて告ふ石見も杜四郎も米六も俱小黙頭て
 それゆえ皆亮査あり。ゆえに盆九郎吾足齋と晩稻とを斫殺しける顛末
 を招きせんと責問へ盆九郎頼まてを跪き陳せり。今何事なり悪
 事。今日も彼末朱之次が我拘杞村の宿所来て密寄り相譚ふ。乾父
 吾足が各處拘神の價百金を今渡さぬの事あるを実母を怪貪ふん
 て手実を引裂捨られし。今も堪がたり。今宵家内潜入りて喰ひあ
 涯りの金銀をのせん。汝ハ晩稻布囊を盗せ肩馳せぬ。咱又彼
 少女ゆも怨あり。利得の金銀等分と憑きし心惑ひて俱納戸潜入りて
 朱之次の那這と撈りて財囊を引ぬ。已ハ晩稻布囊を盗せてを脚を
 緊し縛りて肩から載て去るを主人あつて来ぬ。玄関の頭小
 て盗見入りぬと思ひけん。罵咄めり刀を抜き撃んと我も野干玉の闇

小紛きて少女を省ふ受し刃尖憐む。少女の深痕に彼人の違ひぬ。欽
 と思ひけん。撈むをゆり。と懐る。刀子をもちて彼人の服腹罵然と刺し
 て角門より逃去る折殿們撞見ふ。搦捕せ今さう後悔別み仔細ハ
 いろどといふ招了分明ありけん。阿夏の老芋ハ羞る色あり又石見次等
 ふうち向ひて笑くが如し。今宵の禍事。我子といふも耻し人いして人
 ありぬ。朱之次の悪心より。這盆九郎さ荷擔して丈夫も女兒も横死の折殿達
 の出来きて。地方も去るを我冤家を搦捕せぬ。人の歎けの中飲ひ多しと
 小間隣家の主人も我出づ俱ぬ。小可の合壁ある。客店の主人も
 津向屋集三即是と嚮ふ。這女房が慌忙し。喚聲ふらちも措き。小野
 等を招て走來ぬ。甲斐も早く早盗見等の逃亡て吾足と女兒の横死を
 るの。相応し。御用もゆる。兼りゆらん。仰付らるるもや。といふ間石見次

身を起しつゝ吾足齋と晩稻の金瘡を得と見て杜四郎号ふ示しつゝ
 大江山張是見ゆゝ晩稻とやんハ深痕也胆胃の二經断絶され
 ば左ても右ても生べらざるも吾足齋ハ刺瘡也亦必死の深痕も
 ども鳩尾猶温めて寸口の脉あるも似たり抑我家昔より仙傳不思議の
 神藥あり約莫刀瘡也死しつゝ者いふ三日を経ざるも其茶を
 用ふ一旦甦生せざる者あり縱令其命長くも或ハ後夏を辨じ
 或ハ遺言を遺る者兒孫の爲小裨益あり只頭を敷落され者五臟
 を破られざる者其效驗あるも正ハ是軍陣必用の奇茶あれ唯等生
 平小腰巾して今も猶茲あり是を以て吾足齋を一霎時ありとも活
 飲といふ四郎も染六も俱ハ感悦大なるも開ハ奇妙なる仁術なるべし
 して石見ハ敢選凝せむ則老亭と集三ふる云々と宣示を相らるる

身を起しつゝ集三一條の布を索ねてきて来り吾足齋の瘡口を三四重
 楚と纏程小老亭ハ茶碗ハ最清の水を汲合りてきて来り當下石
 見ハ腰小吊する茶箆を啓けても彼仙丹を吾足齋の口中ハ推入て
 件の水も濺下せば津向屋主僕ハ吾足齋を抱起し老亭も俱ハ聲を合
 して嘯々と呼活ること半晌許其聲もや耳ハ入りけん吾足齋ハ忽然と
 眼を睜り左見右見て原来俺身ハ死しつゝ欬といふ小老亭ハ欬といふ
 推り附く喃我伏心地正可ハ做りぬ欬今宵おん身ハ瘡を負せしる
 冤家ハ枸杞村の金九ありて這殿達ハ搦捕して牽れて今猶茲ハ在り
 晩稻の横死ハおん身の怨親の又ハ身を果しつゝ事の起りハ朱之次ハ拘神の
 價百金の空ありしを怨しけん金九郎ハ伴ふて子二刻の時候潛び来て
 身ハ納戸ハ秘置しぬ財囊を奪ふて逃去りぬ晩稻の上ハ箇様々おん身

の甦生の茲こゝ小まを高鳴大人の御庇ごびを仙傳せんでん奇特きとくの神藥しんやくの即效そくこうふよと
 信しんずあれと告つふ領うりく吾足齋ごそくさいへ憶おぼれども嗟嘆さたんる形貌かたちを改あらため膝組ひざぐみ直ただし
 て石見いし見又また告つふ謝あやすといふやう。告つふは面おもた事ことあつて是こゝは後の誠まことふ做なす
 あんを俺おれ渾家むんけも人々ひとびとも听きぬやう。誠まことふ善惡ぜんあく応報おんぱうの終つひ小脱せうだつといふ理ことを
 物の本もとの寫ありてありて孰たゞも知しりて支たまはらる。怨うらみ或あるは思おもひもせざる。人
 我わが允夫いんぷの愚おろかさ蓋當けふたう夏なつ晚ゆふ船ふねの悪瘡あくそう療藥りやうやく術計じゆけい盡つし折住せぢゆ吉きちの神主かみぬしの
 家いへ小其藥せうきやくありと告つふえ一ひと二ふた伏ふしの日の暑あつも殺ころす我身わがみ那里どこ尋たづねた小藥方せうやくかた
 をの傳授でんじゆせられて拘神くしん一枚用いちまいようひま即效そくこう疑うたがひありとの但たゞし拘神くしんの和漢わかん小稀せうき
 あり。價あひ百金ひやくきんありと告つふせびとらんとしりて奇方きかたをばらる。嬉うれしけれども
 俺おれ百金ひやくきんの貯録ちりよくあり。いふをばらと思難おもひがたて旅宿りよしゆくうす夕月ゆふづき夜任よりにん吉きちの郷きやうを
 距さること十町じゆちやうをりる。賸路あはれちみちを過やつて程ほどのと見みえ去い向むふ西にし個この小せう年ねん一箇いちこの

財囊さいのうを争あつて挑戦てんせんふ程ほどとあれ月額げつがくの迹あと最長さいちやうに一人ひとりの竟は勝かちむを
 ありけん持もつ財囊さいのうを捉とれられと後方あうほう迫おみ投遣なりし折せりく照てす月
 雲うん隠かくして朦朧もうろうと做なす隨まふ俺おれ竊窺せつせうてあり。はがた拘神くしんありと
 てもそを買合かひあはす。百金ひやくきんあり何なにをりて本意ほんいを遂とげ那財囊あのさいのうの重おもや
 る。投なりし時とき大地だいち小せう応おて音おとせしより推量おしやうする東西とうし尋たづねを知るしるべ
 の。今いま是こゝを採とりむもあは宝たからの山やま入いる。手てを空そらまき歸かへる。似に
 たり。嗚呼あゝ小せう也やと身勝手みかちてふ惑初まよひはつなる不美ふみの慾よく徐じゆ哩り々と近ちかつ就つて件けんの財
 囊さいのうを合あはさる時とき手て小障せうしやうる小石せうせき三さん隻しやくあり。當下たうげ俺おれ又またむら。財囊さいのうを這儘
 搔か攪かひる。他た等ら必かならず外人あうじん小せう奪だつれりと思おもふ。然しかして今いまより後々のちのち背せ負おかす
 所ところあり。要えんをあれと尋思じんしをさる。遠とほく財囊さいのうを因ゆゑに有あり。圓金えんきん二に裏うらを
 天あまの與あへと懷なへ楚そと扱あり。件けんの小石せうせきの程ほどとを二隻ふたしやく拿とりて開ひらか儘まま財囊さいのうを



十六
ろろ六
ろろ九郎

高嶋の仙丹
暫時
吾足齋を活
つと八や集三

入易て手を平く紐を結びて舊外に竊歩する樹間に入りて其
 も其首を立まらるる當晩浪華の旅店に單孤燈の下に之件の金子を
 数ま見ま六百九十五両あり是れ拘神を講じて尚八九十金の餘りあり
 と思ひ心づりあり浪華の京左界大津草津の盡處までも約莫藥店
 のあり涯りをきく拘神を徴り小竟亦あると云はれ只得宿所かへ至
 來る俺妻阿夏の老芋の件の子の實事を告を這回京を憶りあり
 一舊知已に逢ひしより尋く資料をゆりとの詭示して更亦又の觀音寺
 の城下より枸杞村久礼畑に至るまで拘神を滅奔せる者あり價百金
 買取るべし其美を尋く書写して隈もく拘示あり小三池の社客
 宿六の汲引を拘神一枚をゆけはと願て晚稻の前用る一夜の間の惡
 瘡愈て跡なきありと云ふ俺歡び知るは然も其次の日小

宿六の僕へ來り拘神の活主朱之ぬみちめ對面を及びておひ
 びや朱某の俺妻老芋の實子も末松珠之ぬみちめ面忘るは年を
 歴する再會の歡び成就て主張當初小異なる俺肚裏に思ふ朱之ぬ
 俺乾兒を晩稻の為小義兄ある他人が今さう拘神の價を取ら
 ざるの要あり俺貯祿の異日亦晩稻の所縁を徴折衣裳調度小做を
 くと尋思をある朱之ぬを并が儘小留り存せと敢拘神の價を遞與せ
 其後城内に試撃の折口も八調手も八挺ある朱之ぬ小勝利あり俺立身
 の階梯小做より思ひに空憑り大江峯張兩少年小戦負て
 刺落馬の撲傷小病卧されは難て只厭し思ひに老芋其
 子を陳難て懲えん為秋拘神の手實を無心小引拆棄しより朱之ぬ
 親を怨て告別して出て今宵五人盆九郎と共小納戸小潛入りて彼一

百九十五金を奪ふて走り去りて欲金丸の晩箱を豪奪して金因りて
 折俺憶りてくる来て間さ迷ふて撃刀の晩箱を害ありの事ありて俺身
 も反て盆丸の為必死の深痕を負ふり。縁故原は色情利慾兩から
 猿馬狂ひ俺昨非を君仕て忠あるを親仕て孝あるを友の信あり。子小
 慈あり果の故郷仕托て他郷の鬼小做すまふ。這禍害小ある野を露の
 命の置た所怨小惑へ。身の闇に夜人の争ふ財囊の金を撥攫ひり幸ありと
 愛歡ひ罪科を思へ盆丸朱之丸等の竊盜無類の悪行と相距るると遠
 うらむ五十歩百歩といふまの。倘他等をの思ふ憎ま鄙語云家を抱て
 臭記を忘る類小似たり。今や中々小悟りぬるも邊々とも。支毎小息吻
 記を實小必死と見えさけ。這段文尚多けと。又下回小解分を聴候り。

新局玉石童子訓卷之十三終 村田

